

# 日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(II) : 高校生が用いる英語力別メタ認知方略と関連諸要因との比較

北 條 礼 子\*  
(平成13年 7 月19日受理)

## 要 旨

本研究の目的は、第一に日本人 EFL 学習者(高校生)が用いているメタ認知方略と関連諸要因は英語力別により差があるのかどうかを明らかにすることであり、第二に英語力別にみるとメタ認知方略の使用を喚起するのはどの要因であるのかを明らかにすることである。1999年4月に新潟県の公立高校3年生 151名を対象に、約15分で集団調査を実施した。その集計結果を基に既にメタ認知方略2因子、学習スタイル2因子、性格特性5因子、動機づけ4因子を抽出した(北條, 2000)。ここではさらに回帰分析、分散分析を行い、メタ認知方略と関連諸要因との関連や、英語力別による違いを検討した。その結果、英語力上位群は主に動機づけによりメタ認知方略の使用を喚起されるのに対して、英語力下位群は性格特性によりメタ認知方略使用が喚起されていることが明らかになった。

## KEY WORDS

学習方略	learning strategy	メタ認知方略	meta-cognitive strategies
学習スタイル	learning style	性格特性	personality
動機づけ	motivation	英語教育	English education
語学教育	language education		

## 1. 研究の背景

Ellis(1996)は、学習中にメタ認知方略が重要な役割を果たしているにもかかわらず、多くの学習者がこのタイプの方略をうまく利用していないことを指摘している。しかし、日本人 EFL 学習者が用いているメタ認知方略に焦点をあてた研究はほとんど見受けられないことから、筆者は日本人 EFL 高校生が用いているメタ認知方略について検討した(2000)。その際、さらに Ellis(1996: 530)のモデルが示しているように、学習者の個人差、状況的/社会的要因が学習方略の選択と使用に影響を与えている。このことから日本人 EFL 学習者が用いているメタ認知方略を検討するにあたり、メタ認知方略がこれらの諸要因とどのようにかかわっているのかを検討しておくことも必要であると考えられたため、この Ellis のモデルにあげられている学習者の個人差のうち、学習者要因と取り上げ、ここに含まれる学習スタイル、性格特性、動機づけと、さらに状況的/社会的要因のうち性差に注目し、学習方略の下位分類の一つであるメタ認知方略とこれら諸要因との関係も検討することにした。

\* 学習臨床講座

筆者による先行研究(2000)において、日本人学習者(高校生)が用いているメタ認知方略として「学習計画・授業集中」、「学習中のチェック」という2因子が抽出された。これら2因子に含まれた項目の全体の平均値を考え合わせると、「学習中のチェック」はあまり使われていない方略である一方、「学習計画・授業集中」は比較的使用されている方略であることも明らかになった。言い換えると、日本人EFL高校生は、学習中にチェックをするという方略より、授業に集中するというメタ認知方略を用いる傾向があることがわかった。

さらに、メタ認知方略の2要因が関連諸要因とどのように関連しているのかを明らかにするため回帰分析を行った。その結果から、「学習計画・授業集中」方略は、統合的動機づけと成績向上意識にその使用を喚起され、「学習中のチェック」は統合的動機づけと道具的動機づけにその使用を促されていることもわかった。

しかし、方略使用は、英語力の違いにより異なっていることが先行研究により報告されていることから、英語力の違いにより、メタ認知方略の使用を喚起する関連諸要因に違いがあるのかどうかを検討することとした。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人EFL学習者(高校生)が用いているメタ認知方略と関連諸要因は英語力別により差があるのかどうかを明らかにすることである。第二の目的は英語力別にみるとメタ認知方略の使用を喚起するのはどの関連諸要因であるのかを明らかにすることである。

なお、ここでは単語テスト得点を英語力として扱った。

## 3. 研究の方法

- 3.1 対象者：新潟県の公立高校3年生 151名
- 3.2 測定具：アンケート：初めに対象者の性別、海外経験、現在の英語学習状況などを問うた後、5段階尺度形式の40項目が続く形式のアンケート。アンケートの内訳は、メタ認知方略11項目、学習スタイル6項目、性格特性15項目、動機づけ8項目である。(調査項目は付録を参照のこと)
- 3.3 調査実施時期：1999年4月
- 3.4 手続き：アンケートは記名式で、実施時間は約15分であった。回答形式は「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階である。アンケート回収後、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。
- 3.5 分析方法：回帰分析、分散分析

## 4. 研究の結果

### 4.1 平均値・標準偏差

メタ認知方略(MC)、学習スタイル(S)、性格特性(P)、動機づけ(M)に関する40項目に対す

る回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は40項目の平均と標準偏差を示したものである。なお、学習スタイル、性格特性、動機づけの項目の平均、標準偏差については筆者による先行研究(2000)で既に提示したが、参考のためここで改めて表示した。

表1：メタ認知方略、学習スタイル、性格特性、動機づけ40項目の平均、標準偏差 (N=151)

項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD	項目	平均	SD
MC1	3.30	0.92	S1	2.81	1.20	P1	2.60	1.13	M1	3.25	1.18
MC2	3.78	0.96	S2	3.05	1.06	P2	4.19	0.87	M2	3.54	1.16
MC3	3.56	0.98	S3	3.02	1.23	P3	2.56	0.88	M3	3.36	1.11
MC4	2.72	1.15	S4	3.23	1.01	P4	3.60	1.21	M4	3.26	1.08
MC5	2.50	1.10	S5	3.05	1.02	P5	2.91	1.15	M5	3.80	1.13
MC6	2.25	1.09	S6	3.30	0.93	P6	2.78	1.10	M6	3.26	1.13
MC7	2.75	1.26				P7	3.25	1.34	M7	2.08	1.11
MC8	2.41	1.02				P8	3.11	1.14	M8	2.11	1.09
MC9	2.44	1.13				P9	3.14	1.22			
MC10	2.93	1.27				P10	2.72	1.22			
MC11	2.91	1.17				P11	2.76	1.00			
MC12	2.93	1.16				P12	1.99	0.94			
						P13	3.26	1.27			
						P14	3.05	1.30			
						P15	2.61	1.13			

## 4.2 英語力別メタ認知方略の各因子の比較について

### 4.2.1 平均値・標準偏差 (因子標準得点)

著者による先行研究(2001)において日本人 EFL 高校生が用いているメタ認知方略として「学習計画・授業集中」、「学習中のチェック」の2因子が抽出された。本研究では調査協力校から得られた単語テストの得点を基に、14点以上の76名を上位群、13点以下の75名を下位群とした。この上位群、下位群を性別で分けた際のメタ認知方略の因子標準得点の平均と標準偏差は表3に示すとおりである。

表3 英語力別によるメタ認知方略因子の因子標準得点の平均、SD

因子	上位群：N=76		下位群(N=75)	
	平均	SD	平均	SD
メタ認知方略因子 I 「学習計画・授業集中」	0.17	0.83	-0.17	0.85
メタ認知方略因子 II 「学習中のチェック」	0.08	0.74	-0.08	0.88

次に、メタ認知方略の2因子につき英語力の上位群、下位群別に分散分析を行った結果は以下の表4に示すとおりである。

表4から、メタ認知方略の因子 I 「学習計画・授業集中」においてのみ上位群が下位群より方略使用が多いことがわかった。

表4 メタ認知方略の英語力別分散分析結果

	F(1,149)	p	上位群	下位群
メタ認知方略因子I「学習計画・授業集中」	6.10	**	>	
メタ認知方略因子II「学習中のチェック」	1.49	ns		

\*\* p&lt;.01

#### 4.3 英語力別のメタ認知方略と関連諸要因の関係

調査協力校から得られた単語テストの得点を基に、14点以上の76名を上位群、13点以下の75名を下位群とした。この上位群、下位群を性別で分けた各因子標準得点の平均と標準偏差は表5に示すとおりである。その上で上位群、下位群別にメタ認知方略得点（標準因子得点）を目的変数とし、学習スタイル2因子、性格特性5因子、動機づけ4因子（各標準因子得点）、性差を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。

表5：英語力別メタ認知方略、関連諸要因の標準因子得点の平均、SD

メタ認知 方略と関 連諸要因	因 子 名	上位群男子		上位群女子		下位群男子		下位群女子	
		N=30 平均	SD	N=46 平均	SD	N=26 平均	SD	N=49 平均	SD
メタ認知 方略因子	I：「学習計画・授業集中」	0.09	0.89	0.22	0.80	-0.05	0.89	-0.23	0.83
	II：「学習中のチェック」	-0.07	0.86	0.18	0.65	-0.16	0.94	-0.04	0.85
学習スタ イル因子	I：「視聴覚型」	0.08	1.11	0.15	0.73	-0.28	1.08	-0.04	1.10
	II：「体験型」	-0.08	1.24	0.03	0.87	0.13	1.02	-0.05	0.96
性格特性 因子	I：「冒険心」	0.09	0.97	-0.02	0.92	0.43	1.05	-0.27	1.01
	II：「自尊心」	0.21	1.05	-0.03	0.85	0.09	1.30	-0.15	0.92
	III：「社交性」	0.26	1.07	-0.07	0.90	0.01	0.80	-0.10	1.13
	IV：「権威主義」	0.05	1.15	0.08	0.92	0.12	1.08	-0.17	0.95
	V：「あいまい性への耐性」	0.17	1.08	-0.00	0.90	-0.13	1.23	-0.03	0.92
動機づけ 因子	I：「統合的動機づけ」	0.01	1.09	0.24	0.77	-0.58	1.01	0.08	1.04
	II：「成績向上意識」	-0.34	1.05	-0.12	0.97	0.33	1.03	0.15	0.93
	III：「道具型動機づけ」	-0.02	1.27	0.10	0.83	-0.00	0.96	-0.08	1.00
	IV：「プライドの充足」	-0.25	0.99	-0.09	0.75	0.48	1.19	-0.01	1.05

##### 4.3.1 上位群

英語力の上位群に関する回帰分析の結果は以下の表6に示すとおりである。

表6から、「学習計画・授業集中」因子は動機づけ因子の「統合的動機づけ」と「成績向上意識」に喚起されることが示唆された。

表7から、「学習のチェック」因子は動機づけ因子の「統合的動機づけ」と学習スタイルの「視聴覚型」に喚起されることが示された。

表 6：メタ認知方略因子 I 「学習計画・授業集中」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F	p
1	動機づけ因子 I 「統合的動機づけ」	0.104	0.104	0.26	7.66	**
2	動機づけ因子 II 「成績向上意識」	0.095	0.199	0.26	9.18	**

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>) \*\* p<.01  
 動機づけ因子 IV 「プライドの充足」 (0.040)  
 学習スタイル因子 II 「体験型」 (0.037)

表 7：メタ認知方略因子 II 「学習中のチェック」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F	p
1	動機づけ因子 I 「統合的動機づけ」	0.055	0.055	0.19	4.26	*
2	学習スタイル因子 I 「視聴覚型」	0.056	0.111	-0.22	4.58	*

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>) \* p<.05  
 動機づけ因子 IV 「プライドの充足」 (0.027)

#### 4.3.2 下位群

英語力の下位群に関する回帰分析の結果は以下の表 8 に示すとおりである。

表 8 から、下位群が用いている「学習計画・授業集中」因子は性格特性因子の「冒険心」に喚起されることが示唆された。

表 9 から、下位群が用いている「学習のチェック」因子は学習スタイルの「視聴覚型」と性格特性の「あいまい性への耐性」に喚起されることが示された。

表 8：メタ認知方略因子 I 「学習計画・授業集中」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F	p
1	性格特性 I 「冒険心」	0.076	0.076	0.18	6.03	*

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>) \*\* p<.01  
 動機づけ因子 II 「成績向上意識」 (0.046)  
 学習スタイル因子 I 「視聴覚型」 (0.036)

表 9：メタ認知方略因子 II 「学習中のチェック」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F	p
1	学習スタイル因子 I 「視聴覚型」	0.114	0.114	0.21	9.38	**
2	性格特性因子 V 「あいまい性への耐性」	0.101	0.215	0.28	9.27	**

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>) \* p<.05 \*\* p<.01  
 動機づけ因子 I 「統合的動機づけ」 (0.023)

#### 4.3.3 上位群と下位群によるメタ認知方略 2 因子と関連諸要因の関係の比較

英語力の上位群と下位群によるメタ認知方略 2 因子と関連諸要因の関係の比較すると以下の表 10 のようになる。

表10：上位，下位群別メタ認知方略2因子と関連諸要因の関係の比較

メタ認知方略因子	1%，5%レベルで選出された関連因子	
	上位群	下位群
I：学習計画・授業集中	統合的動機づけ 成績向上意識	冒険心
II：学習中のチェック	統合的動機づけ 視聴覚型学習スタイル	視聴覚型学習スタイル あいまい性への耐性

表10から，上位群はメタ認知方略の使用を，動機づけと学習スタイルにより喚起されているが，下位群では，メタ認知方略の使用は冒険心，あいまい性への耐性という性格特性や学習スタイルにより喚起されていることがわかった。ただし，学習中のチェックという方略については，上位，下位の両群が学習スタイルのうちの視聴覚型に喚起されており，この点で共通していた。

以上から，メタ認知方略使用にあたって，英語力の高い学習者は動機づけがその使用に影響を与えている一方，英語力が低い学習者においては，動機づけではなくむしろ性格特性が影響を与えていることが明らかになった。

## 5. 考 察

### 5.1 英語力別メタ認知方略使用の差について

本研究では日本人学習者（高校生）の用いているメタ認知方略の2因子である「学習計画・授業集中」，「学習中のチェック」の2因子について英語力の上位，下位群別に分散分析を行ったが，その結果メタ認知方略の因子I「学習計画・授業集中」においてのみ上位群が下位群より方略使用が多いことがわかった。高校生の英語力上位者は英語の授業に集中する傾向があることが示されたといえよう。

### 5.2 メタ認知方略使用を促す関連諸要因の英語力別比較について

次に，英語力テストの得点によって，高校生を上位群，下位群に分け，それぞれのメタ認知方略が関連諸要因とどのように関連しているのかを調べた。

回帰分析の結果，英語力の上位群ではメタ認知方略使用は統合的動機づけ，成績向上意識という動機づけと視聴覚型学習スタイルにより喚起されているが，下位群ではメタ認知方略使用は冒険心，あいまい性への耐性という性格特性や視聴覚型学習スタイルにより喚起されていることがわかった。ただし，学習中のチェックという方略については，上位，下位の両群が学習スタイルのうちの視聴覚型に喚起されており，この点で共通点がみられた。

以上から，英語力の高い学習者においてはメタ認知方略使用と動機づけの関連が強い一方，英語力が低い学習者においては，メタ認知方略は動機づけではなくむしろ性格特性と関連があることが明らかになった。

Samimy and Tabuse(1992)はL2学習が成功するかどうか潜在的に影響を与える要因として，動機づけの他に不安，自尊心，冒険心を指摘している。本研究では，少なくとも英語力上位群において，統合的動機づけ，成績向上意識という動機づけが授業に集中するというメタ

認知方略の使用を促すことが明らかになった。一方、英語力の下位群はメタ認知方略の使用を動機づけには喚起されないこと、またその一方では冒険心には影響を受けることも明らかになった。本研究では英語力を考慮に入れると、メタ認知方略使用に影響を与える要因として、動機づけの存在が確かめられたと判断できよう。この結果は、Samimy and Tabuse (1992) の指摘を一部支持する結果であると考えられる。

また本研究の結果では、英語力の違いによってもメタ認知方略の使用に性差の影響はみられなかった。これまで学習方略に関する先行研究 (Oxford 他, 1988; Yabuki, 2000) は、女性は男性より学習方略を多く使用することを報告している。Oxford 他は、この理由として女性が男性に比べて社会的に人との関わりを求め、社会的、文化的様式を受け入れ、コミュニケーション能力発達に結びつく傾向が強いことがあげられている。このような指摘の対象となる学習方略は特に社会的/情意的方略であると考えられ、今回の研究ではメタ認知方略が研究の対象であったこともあって、その使用に性差の影響が少なかったと推測される。

### 参 考 文 献

- Clement, R., Dornyei, Z., and Noels, K.A. 1994. Motivation, Self-Confidence, and Group Cohesion in the Foreign Language Classroom. *Language Learning*, 44, 3, 417-448.
- Cohen, A.D. 1998. *Strategies in Learning and Using a Second Language*. Longman.
- Ellis, R. 1996. *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.) Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_. 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Hojo, R. 北條 礼子. 2000. 「日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(10)」上越教育大学研究紀要 第20巻 第2号 499-507.
- \_\_\_\_\_. 2001. 「日本人 EFL 学習者の語彙学習方略と関連について」上越英語研究 第2号 3-19.
- Oxford, R., and Shearin, J. 1994. Language Learning Motivation: Expanding the Theoretical Framework. *Modern Language Journal*, 78, 1, 12-28.
- \_\_\_\_\_. (Ed.) 1996. *Language Learning Strategies around the World: Cross-Cultural Perspectives*. University of Hawaii at Manoa.
- Rubin, J. 1996. Using Multimedia for Learner Strategy Instruction. In Oxford, R. *Language Learning Strategies around the World: Cross-Cultural Perspectives* (151-156).
- Samimy, K.K. and Tabuse, M. 1992. Affective Variables and Less Commonly Taught Language: A Study in Beginning Japanese Classes. *Language Learning*, 42, 3, 377-398.
- Yabuki, Y. 2000. A Study of the Correlations of Learner Characteristics and Vocabulary Learning Strategies of Japanese EFL High School Students. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.

## 付録：調査項目

## I. メタ認知方略11項目

1. 私は英語の授業中、気持ちを集中している。
2. 授業中先生があなたを指名しなくても、頭の中で答えを言ってみる。
3. 先生など人から自分の誤りを指摘されたら、その理由を考える。
4. 英語を勉強するたびに、今日することはこれとこれ、というふうに目標を決めている。
5. 私は時間を決めてほとんど毎日英語を勉強している。
6. 宿題など、何か課題をするとき、どのくらい難しいか、どのくらい時間がかかるかについて考える。
7. 単語など、計画的に、毎日なにか新しいものをおぼえようと努力する。
8. テストなどよい結果だったら、どうしてそういう結果になったのか理由を考えてみる。
9. 英語の得意な友人に単語のおぼえ方など勉強の方法を聞いてみる。
10. 自分に合う英語の勉強法を決めるため、いろいろな方法を試してみる。
11. 単語をおぼえる方法など、どの方法がうまくいって、どの方法がうまくいかなかったかを意識する。

## II. 学習スタイル6項目

1. テレビ番組やビデオの教材を用いて勉強することが好きだ。
2. LL で外人の自然な発音を聞きながら勉強するのが好きだ。
3. グループになって対話練習やゲームをして勉強することが好きだ。
4. 何かをするとき、その指示を誰かに読んでもらうより、自分で読む方がいい。
5. 教科書を読むより、先生の説明やテープを聞く方がいい。
6. 何かをするとき、その指示を読んだり聞いたりするより、まずしてみるほうが好きだ。

## III. 性格特性15項目

1. 私は解けないような問題ほど解いてみたくなる。
2. 映画や小説（読み物）では、はっきりした結末があるものが好きだ。
3. 自分には長所がたくさんあると思う。
4. グループ活動はリーダーが重要だと思う。
5. 初めて会った人でも、すぐ話しができる。
6. 私は難しいと思うことほど、やってみたくなる。
7. ジョークのおちがわからなくても、ちっとも気にならない。
8. 知らない人でも緊張しないでディスカッションできる。
9. 人に勝ると思う科目やスポーツがある。
10. 年長者や目上の人ともうまくやっていける。
11. 自分にはいろいろな良い素質がある。
12. 質問はないかと聞かれて、聞きたいことがあれば指名されなくても、自分から質問する方だ。
13. 人が笑っていても、何をわらっているのか全く気にならない。
14. 先生や先輩など、目上の人と緊張しないで話すことができる。



15. 私は誕生会など人の集りで、雰囲気盛り上げるのが得意である。

#### IV. 動機づけ8項目

1. 英語ができれば英語を話す人々と、より簡単に友人になることができるから。
2. より多くのさまざまな人と出会い、話しができるようになるから。
3. 将来、良い職業に就くために必要だから。
4. 社会的に認められるには、少なくとも1つの外国語を使えることが必要だから。
5. 学校で英語の試験があることや、進学するための入試科目だから。
6. 英語の試験でいい点数を取って、よい成績をとるため。
7. 英語で良い成績を取ると、親がほめてくれるから。
8. 英語で成績が良いと、先生や友達の評価が高まるから。

## A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (11)

HOJO Reiko\*

Little research has been done on the relationship between the meta-cognitive strategies and other factors considering different levels of learners; students with higher English ability and those with poorer ability.

The main purpose of this study is to investigate whether any difference can be seen between better learners and poorer learners in the use of meta-cognitive strategies and other factors related to the strategies of Japanese EFL high school students. The second purpose of this study is to compare how each meta-cognitive strategy was evoked by the factor related, such as learning style, personality and motivation.

First, data on the factors mentioned above were gathered from one hundred and fifty-one third year high school students in April of 1999 using a questionnaire consisting of forty items total. Secondly, the data were analyzed by factor analysis, extracting 2 factors for meta-cognitive strategies, while 2, 5 and 4 factors were extracted for learning style, personality and motivation respectively. Thirdly, analysis of variance was administered to all the factors extracted above, showing that only one meta-cognitive strategy was used more frequently by better learners, while 3 factors of motivation showed significant difference and tendencies between the two groups. Finally, regression analysis proved that the use of each meta-cognitive strategy was evoked by different factors of learning style, personality and motivation. The use of each meta-cognitive strategy by better learners was mostly related to motivation factors, while the use of the strategies by poorer learners was mostly related to learning styles and personality factors.

---

\* Division of Learning Support